HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域と研究者を結ぶプラットフォームとしてのリポジトリの可能性 ： 研究成果を地域に還元するための HUSCAP活用の試み
Author(s)	山村, 高淑
Description	第5回DRFワークショップ「2009年、いま改めてリポジトリ」、主催：DRFデジタルリポジトリ連合、後援：国公私立大学図書館協力委員会、日時：平成21年11月11日（水）10:30～17:00、場所：パシフィコ横浜 第11回図害館総合展 フォーラム特設A会場、セッション1「リポジトリがより活用されるために」
Relation	第5回DRFワークショップ「2009年、いま改めてリポジトリ」. 平成21年11月11日. 神奈川県横浜市.
Issue Date	2009-11-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39834
Type	lecture
File Information	20091111_DRF5_Yamamura.pdf, 配布資料

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

地域と研究者を結ぶプラットフォームとしてのリポジトリの可能性
～研究成果を地域に還元するための HUSCAP 活用の試み～

北海道大学観光学高等研究センター・准教授
山村高淑
deko@sd6.so-net.ne.jp

１． リポジトリ整備の三つの現在的意義

(1) 情報バリア（ふたつの壁）の解消

・ 研究成果はふたつのバリアによってそのアクセスを大きく制限されてきた。しかし世の中の変化が急激な昨今、それでは環境変化に対応できなくなっている。

① **地理的な壁（地域間情報格差）**

※ 中央集権から多極分散、地方の時代へ。

・ これまでは…東京に行かないと資料が集まらない→地方は常に情報アクセスにハンディがあった。

・ 情報社会の到来により…だれもがどこからでも情報アクセス可能に→情報インフラの整備により地理的ハンディが解消→中央集権から多極分散への移行。

・ 「東京の情報と価値観に依存する地方」から「自らの情報を、誇りを持って発信する地方」へ→多様な価値観が共存する社会へ＝地方大学の責務。

② **学会という壁**

※ 社会で起こっている諸問題はもはや既存の学問体系では対応不可能。

・ 学会…学会員という選ばれたメンバーだけが研究成果を共有＝専門家のための専門家による情報蓄積（情報の独占）。

・ 何のための研究なのか…研究者はその成果を常に社会に還元すべく努力すべきでは→本当に求めている人のところに情報が行くことが重要。

・ 特に観光研究は、社会科学分野の中でも、非常にすそ野の広い分野であり、学会で成果を発表するだけでは、社会的貢献度は限定される。

・ リポジトリで公開することで、不特定多数の分野・業種に成果を公開することができ、成果の社会還元・応用の可能性を大きく広げることができる。本来、学会等では知り合うことのない分野との連携も可能に。

(2) 成果公開速度の向上

① **研究プライオリティーの確保**

※ 新規採用の停滞、職場の高齢化など、若手研究者・PD の雇用環境を巡る状況は極めて厳しい。また世の中の変化のスピードも極めて速くなっている。したがって、

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

若手は既存組織に頼らない独自の研究公開手段を持ち、成果を PR、自己営業をしない限り、専門家として生き残れない。

- 新たな発見や着想、その仕事が誰によるものであるのかを、まずは広く公開することが重要。
- 公開することで、アイデアを守る、という逆転の発想。

② **地域社会にとっての意義**

※ 地域からの大学批判…地域を「研究題材の狩場」としてしか考えてこなかった大学に対する地域の側からの不信感が厳然として存在する。

- 観光研究の多くは、地域社会で実際に起こっている現象を、現地に入って研究するという手法を採る。
- こうした場合、地域側の協力が必要不可欠。調査の途中経過・結果、研究成果をいち早く地域に公開・還元し、適宜修正意見を求める必要がある。

(3) 一般市民への利益の還元

※ 大学における教育・研究は税金の支援を受けている。その説明責任と利益の還元をどのように納税者に対して行っていくか、大学には具体的行動が求められている。リポジトリにはその方策として大きな可能性がある。

- 上記のような研究成果の社会還元は、税金の支援を受ける大学（特に国公立）の責務、納税者に対する知的利益の配当と位置づけるべき、と個人的には考える。
- 「広く一般社会に成果を還元する」ための有効なツールとしてリポジトリは必要不可欠。公開・アクセスの平等性の面から言っても、リポジトリ整備は納税者への説明・利益還元方法として極めて適切な方策であると考える。公的整備の充実を望みたい。

２． HUSCAP[1]を用いた地域との共同研究成果公開の試み

(1) 三つのプラットフォームの役割分担

- **北海道大学機関リポジトリ「HUSCAP」**（図 1）…学会論文、紀要、公的なペーパーなどをアーカイヴ化→**「最終成果物」**を公開する場。
- **鷲宮町商工会との共同研究成果公開ホームページ「Washipedia」**（図 2）…調査報告、アンケート単純集計表などをアーカイヴ化→「プロセス（途中経過）」を公開する場。なお、Washipedia は北海道大学観光学高等研究センター文化資源マネジメント研究チーム（山村高淑研究室）と埼玉県鷲宮町商工会が共同で開設した、共同研究成果公開ページ。管理人は筆者。

[1] HUSCAP: Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers. 北海道大学の機関リポジトリ。

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

- **独自の Web ジャーナル「WoTaCS」（図 3）**…既存の枠組みに当てはまらない**「論考を発表・公開し議論」**する場。大学院生や若手研究者が既存の学問的枠組みを超えて自由に議論できるよう、大学・立場の枠を超えて、「文化資源マネジメント研究会」を設立、同時にウェブジャーナルを開設。WoTaCS は Web-Journal of Tourism and Cultural Studies の略。管理人は筆者。

(2) 相互リンクの構築

- 「HUSCAP」「Washipedia」「WoTaCS」それぞれのプラットフォームの役割を明確にし、相互に連動させることで、研究開始から最終成果物の発表まで、できる限りの情報の公開を図った（図 4）。
- これにより、チームメンバーや地域の関係者から、常時フィードバックが得られるようになった。また、外部からの問い合わせに対しても、当該するプロセスの URL を提示することで、適切な説明を行うことが可能となった。この点は特に地域の側からその有用性を認めて頂いた。

図 1　HUSCAP

(URL) http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

図 2　Washipedia

(URL) http://www.cats.hokudai.ac.jp/~deko/washipedia.html

図 3　WoTaCS

(URL) http://www.wotacs.com/

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

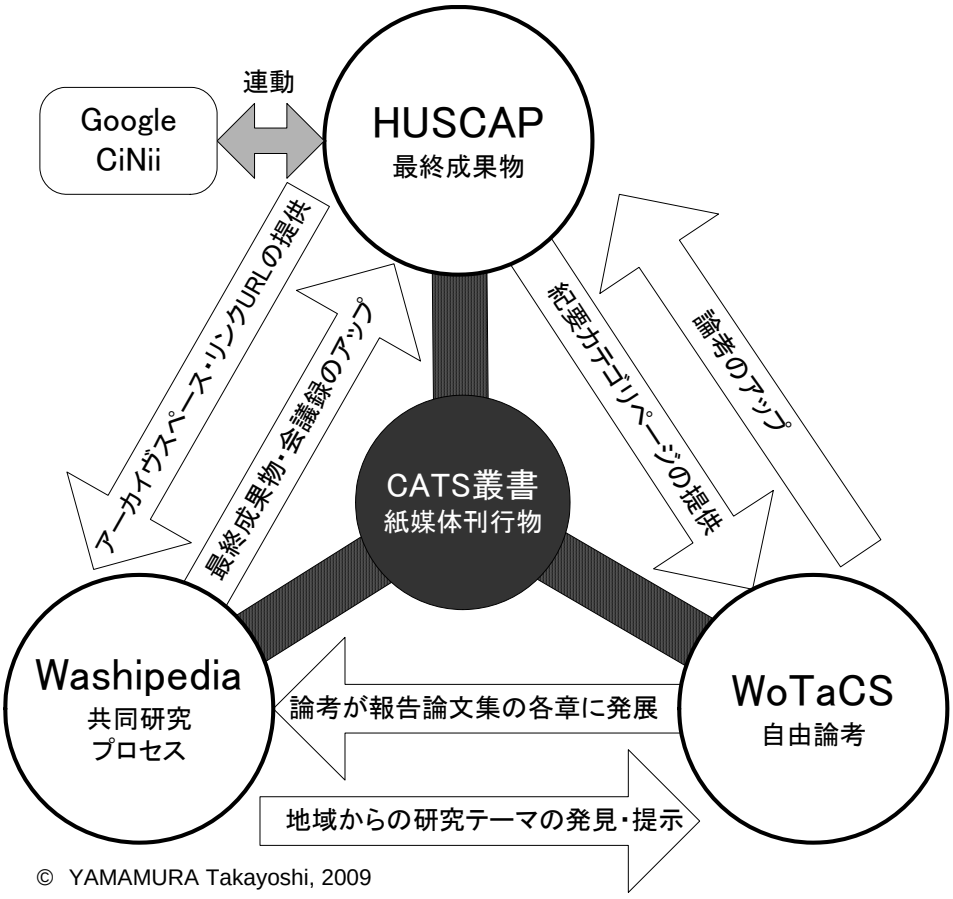

図 4　三つのプラットフォームの機能連携

（出所）筆者作成

(3) 最終成果物としての叢書刊行

・ こうして進めた共同研究の最終報告書は HUSCAP にアップするとともに、叢書として紙媒体で印刷刊行も行った。北海道大学観光学高等研究センターの紀要「CATS 叢書」[2]の第 1 号がこれに当たる[3]。

[2] CATS：Center for Advanced Tourism Studies の略。
[3] CATS 叢書第 1 号『メディアコンテンツとツーリズム:鷲宮町の経験から考える文化創造型交流の可能性』。URL： http://hdl.handle.net/2115/38119 より全文ダウンロードが可能。

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

３． リポジトリ活用の工夫とメリット

(1) 著作の検索率・引用率の向上

- HUSCAP は CiNii、Google 等の検索エンジンに連動。著作の検索率・認知率が著しく向上した。
- その結果、著作の引用率が上がった。論文の評価はインパクトファクターのほかに、もう一点、引用数という指標がある。論文の学術的貢献度という面から非常に重要な指標である。リポジトリはその最大の武器となる。
- 今後、情報化が進むと、信頼できる論文検索サイトで検索して引っかからなければ、（あってはならないことだが）その論文は無いと認識される、すなわち、既往研究として認知されない危険性がある。事実、学生の既往研究調査の様子を見ていると、その傾向が極めて強い。

(2) 情報の信頼度とデータ保存の安全性の向上

- 情報化が進み、玉石混交の情報が錯綜する中で、公的機関が当該情報をアーカイヴ化し、永久保存することにより、当該情報の信頼度とデータ保存の安全性が高まる。
- 重たいデータでも保存してもらえるため、そのデータの URL を自分のサイトにリンクすれば、自らサーバーを構築せずとも、サイト上に自分の文献リストを構築できる。
- この点は、若手研究者にとっては極めて重要。所属部門の一人当たりのサーバー容量は限られているし、管理者権限が複雑で、なかなかうまくデータベースを構築できない。また自腹でサーバーを構築する余裕もない。

(3) 研究プライオリティーの確保

- 研究プライオリティーを守る手段としてリポジトリは大いに活用が可能。研究成果や調査で発見した事項の先取権を確保するためのアピールの場。
- 筆者は試みに、上記の「WoTaCS」ならびに「CATS 叢書」で発表する著作に関しては、全てクリエイティブ・コモンズのライセンス表示を行い[4]、引用の際のルールを明示している。

４．リポジトリがより活用されるための今後の課題～まとめにかえて

(1) 研究評価のもうひとつの指標としての活用

これまで研究者は学会誌における査読付き論文の数にあまりにもこだわりすぎてきたような気がします。もちろん、インパクトファクターが学術的に極めて重要な指標であることは論を待ちません。しかしそれだけでは結局社会に対して、市民目線での研究成果還元

[4] 表示の例：本書はクリエイティブ・コモンズの「表示-非営利-継承 2.1 日本ライセンス」の下でライセンスされています。出典を明記された上での学術・非営利目的の引用はこれを禁じるものではありません。詳しい利用条件に関してはライセンスページ記載事項
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/ をご参照ください。

© YAMAMURA Takayoshi, 2009

がままなりません。地域や住民（納税者）のために役立つ、本当に困っている人々に使ってもらえる、そんな研究を進めるためのツールとして、リポジトリは大いにその利点を発揮できると私は考えています。HUSCAP のようなリポジトリは、実はそうした、研究界と一般社会とのギャップを埋めるための、あるいは研究界の閉塞した環境に風穴をあけるための、革命的なツールになり得ると思っています。特に、これまでチャンスの無かった若手研究者にとってはこれほど大きな武器はないのではないでしょうか。

(2) リポジトリの新たな仕組み構築に向けて

だからといって、リポジトリに全く問題がないわけではありません。最大の課題は、著作権・著作者人格権をどう保護し、ロイヤルティ（印税収入）をどう考えるか、という点にあると思います。というのも、利用者にとっては、ある研究者の著作全てにリポジトリを通してアクセスできればこれほど便利なものはないと思うのですが（また個人的にはそうなってほしいと思うのですが)、その場合、出版社が商業出版している単行本や、学会が著作権を所有する雑誌論文等も含まれ、こうしたものの取り扱いに様々な問題が生じてくるからです。おそらくリポジトリの推進に対して、慎重論・反対論が出るひとつの大きな理由はここにあると思われます。

私自身は今後、機関リポジトリにおいても、ダウンロードの有料化を考える必要が出てきてしかるべきだと考えています。そしてその際、著作を以下の二つに分けて考える必要があると思います。すなわち、①無償公開すべき公益性の高い論文や報告書、②ロイヤルティ（印税収入）を期待すべき著作、の二種類です。そして、②の場合は、1 ダウンロードあたりの料金を設定し、利用者が購入する、というシステムを採る必要があると考えます。

なぜこのようなことを申しあげるのかと言いますと――もちろんこの点に関しては慎重な議論が必要ですが――例えば、出版社での商業出版物も、今後、機関リポジトリと連携することで、こうしたシステムを構築できないか、と考えるからです。出版社は現在、「専門書が売れない」風潮に頭を痛めています。また、我々研究者にとっての悩みの種は、単行本を出版する場合、通常初版は多くて 2 千部程度だという点です。つまり、苦労して書いた著作も 2 千人にしか読んでもらえない。おそらくこの辺りに、利用者の利便性も含めた、リポジトリの新たな展開のヒントがあるような気がしています。これだけインターネットが普及・発達し、情報環境が激変した現在、我々研究者も、そして出版社も、次世代の出版モデルを真剣に考えなければならない時期にきているのではないでしょうか。

もちろんダウンロード販売においては、コンテンツの違法コピー等に関してのリスク対策が必要不可欠ですが…いずれにしても、一研究者として、今後の DRF ワークショップにおいて、「情報アクセスの利便性の向上」「ロイヤルティの保護」という点にも配慮しつつ、次世代型システムの構築に向けた踏み込んだ議論が展開されることを期待しています。

（了）